

六月二日 蚤に眠れどりき

翌日晴れる天氣を知るや蚤多き

六月三日 薔薇

薔薇かざす後ろ姿や廂髪

六月四日 節句

朝晴の山色青し鯉幟

六月五日 螢庭にとぶ

庭風呂に三日の月やとぶ螢

暑さの折柄の晝の休の眠氣さましの友にもと、

可笑しき狂言の一節左に、

狂言 (附子)

主人「此あたりの大名で御座る。今日はさる方へ来る太郎をよび出し申し付くる事がある。太郎冠者あるか。太郎冠者「ハア」主人「居たか」太郎「お前に」

主人「ねんなう早かつた、次郎冠者もよべ」太郎「畏

つて御座る、次郎冠者召すは」次郎「心得た、御前

に」主人「汝等をよび出すは別の事でない。今日は

さる方へ行く、兩人共に留主をせい、冠者二人「畏

つて御座る」主人「夫に待て」主人「やい、此あなた

に附子がある程に、さう心得い」二人「夫ならば兩

人共に御供を致しませう」主人「さうではない、此

あなたに附子と言ふて毒が有る、此方から吹く風

が當つてさへ滅却する程に、さう心得い」二人「畏

つて御座る」太郎「やい、次郎冠者、今日の様な

留守はわるまいぞ」次郎「かう、そなたか供に行

けば身供が留主をする、身供が供に行けばそなた

が留守をする、今日の様に言ひ合はせた留主は有

るまいぞ、そりやわ」太郎「何事じや」次郎「附子の

方から風が來た、此處にて放せ」太郎「身供はわの

附子を見ようと思ふ」次郎「やくたいもない事を、
 置け」太郎「あの方から来る風が當らねば苦しうな
 い、扇いでくれ」次郎「心得た」太郎「扇げまゝ」次郎「
 心得た、ぬかるな」太郎「ぬかる事ではない、さあ
 紐をといたぞ、さて蓋をわけよう程に扇げ」次郎「
 心得た」太郎「さて蓋をわけたぞ、身供はあの附子
 を見てこう」次郎「一段とよからう」太郎「やいやい
 見て来たは」次郎「どんなものじや」太郎「何じやは
 知らぬが黒いものがどんみりとしてある、うまそ
 うなものじや程に身供は食うて見よう」次郎「やく
 たいもない事を置け」太郎「身供は附子にりようじ
 られたか、食いたうてならぬ食うて来う（太郎附
 子を食ふ）む、」次郎「やい太郎冠者何とした」
 太郎「砂糖じや」次郎「何じや砂糖じや」太郎「中々」
 次郎「どれ〜」太郎「先づ食うて見よ」次郎「心得た

む、誠に砂糖じや」太郎「これを食はずまいと思
 うて附子じやの毒じやのとかしやつた」二人「さて
 甘い事かな」太郎「は、うよい事めさつた、頼
 うだお方の附子じやの毒じやのとかしやつたに、
 皆お食やつたと頼うぞお方のお歸りなされたら何
 と申し上ぐる」次郎「身供が置けといふたにあげた
 某がまつすぐに申し上ぐる」太郎「やいやい、これ
 はじやれた事じや、此言譯は、あの掛物をやぶれ
 ばよい」次郎「心得た、ささり ささり」太郎「よい
 事めさつた、あれは頼うだお方の牧溪和尚の墨繪
 の觀音で御秘藏なされたものを、あの様に召さつ
 た、お歸りなされたら、屹度申し上ぐる」次郎「や
 ぶれといふによつてやぶつたと身供が申しあげる
 太郎「やい〜これもじやれ事じや」次郎「扱この言
 譯どもは何とするぞ」太郎「此大天目を割れば言譯

「かたつ」次郎「いかないかな、又迷惑をさせうで」
 太郎「身供も手を掛ける、そちらを持って」次郎「心得た」太郎「グワラリ」次郎「チン」太郎「扱お歸りなされば泣いて居よ」次郎「泣けばよいか」
 主人「只今罷り歸る、やいやい戻つたぞ」二人「泣け」主人「心もとないが何事じや」太郎「次郎冠者申し上げい」次郎「わごりよ申し上げさせませい」太郎「お留守を大事と存じて、次郎冠者と相撲を取りまして御座れば、次郎冠者は手取りで御座り、私が小股を取つてこかしますと、こけまいと存じて掛物に取りついたらば、あの様になりました」主人「これはいかな事、あれは身供が秘藏の観音をあの様にしをつた」次郎「かへしさに天目の上に投げられましたあの様に微塵になりました」主人「是はいかな事、おのれを何としたものであらうぞ」

太郎「か様に大事のお道具を書ひまして生けては置かせられまいと存じて、附子を食べて死なうと存じて下されたれどもまだ死にませぬ」主人「おのれ等今の間に滅却せうぞ」太郎「一口食へどもまだ死なす」次郎語「二口食へども死なれもせず」太郎語「三口四口」次郎語「五口六口」二人語「十口あまりになるまで食うたれども死なれぬ生命自出度さよ、なんぼう」主人「やいそこな奴」次郎「はわ」太郎「は何としたものであらう」主人「まだおのれは、夫に居る」二人「免さつしやれとと」主人「やるまいぞとと」(おはり)

金魚物語

雨 峯 生

わたくしは元高田村山吹の里と申す片田舎に生